

クリストとジャンヌ＝クロードの作品

—1960年代以降の作品を中心に

日置瑤子(京都大学)

クリスト(1935-)とジャンヌ＝クロード(1935-2009)は、1961年から包まれたドラム缶をケルン港の埠頭で発表したものを始めとして、美術館の野外においても作品を発表してきた。彼らは日本でも作品を発表しており、《The Umbrellas》(日、米、1984-91)では、茨城の山あいの川や田畑に青色の大きな傘が置かれ、人々が近づいて観たり、遠くから眺めたりできるようになっていた。一般に、クリストとジャンヌ＝クロードの作品はランド・アートとして、あるいは梱包して対象の役割や機能を明るみにするものとして紹介されてきた。現在に至るまで彼らの作品は、クリストが制作するドローイングやコラージュの売却によって賄われる。この点も彼らの活動の特徴である。また、2000年には長谷明美がプロジェクトの形成から着目することで「つかの間の記念碑」として論じた。彼らの野外での作品発表は1960年代から現在まで続けられており、作品の様相には変化が認められ、新たな解釈の余地があると言える。彼らの作品は、包むことや、あるいは制作が大掛かりで大勢の手を必要とすることから参加が注目されがちであるが、それだけではない。

本発表では、まず、作家が作品の場所を選び、その場に元からなかったものを新しく置くことが観察されることに注目し、彼らの作品には「知覚の拡張」があることを考察する。彼らの作品は、第一に、たとえば《Wrapped Coast》(豪、1968-69)では海岸地帯が白い布で覆われ、《Surrounded Island》(米、1980-83)では島の周りの海面一体がピンクの布で覆われることからわかるとおり、自然が覆われる。第二に、時には、歴史的背景のある建造物が覆われる。黄色の布が使われた《The Pont Neuf Wrapped》(仏、1975-85)、銀色の布が使われた《Wrapped Reichstag》(独、1971-95)などがある。第三に、選ばれた場を覆いはしないが、傘や門というその場には元からなかったものを点在させて展開されるものがある。そしてまた、彼らは精力的に自分たちの作品を説明してきた。このなかでは、クリスト本人によって、自分のプロジェクトが場(site)の芸術だと述べられ、場所を借りることでそれぞれの場所や空間が既に持っている要素を受け継いで自分の作品に取り込むと述べられた。

発表者には、芸術には、他からの影響を受けて変わることを認める意味での「変容許容性」、対象そのものという意味での「場所性」が見出されると考えられる。そして、本来の自分が取り戻されると考えられる。これらから、彼らの作品は、場の目的ならびに先入観というヴェールを剥ぎ取り、場そのものの美を表現したものだと考えられる。この背景では、作家と私たちが自分を取り戻し、各々の美、すなわち各々が認める美の基準が見直され、ならびに拡充されていると考えられる。

このように本発表では、クリストとジャンヌ＝クロードの作品において1960年代以降の作品を中心に彼らの芸術を見直していくことで、彼らの意図を導きだしながら美術史における作品の位置が考察される。